

オプション教材ワタスゲ 読解マラソン集



読解問題のもとになる長文です。読解問題をやる人は、時間のあるときに読んでおきましょう。

読解問題は、清書の週で時間があまったときにやってください。時間がないときは、やらなくていいです。

読解問題は、選択式問題の解答のコツをつかむために行います。適当に全問やるのではなく、一問か二問でもいいですから確実に正解にするつもりでやってください。

読解問題の答えを作文用紙に書く場合は、問題の番号と答えがわかるように書いてください。書き方は自由です。読解問題の用紙は返却しませんが、選んだ番号と正解は「山のたより」に表示されます。

読解マラソンの問題のページから答えを送信すると、その場で採点結果が表示されます。（この場合、作文用紙に答えを書く必要はありません）

▼作文用紙に答えを書く場合（書き方は自由です。作文用紙の余白などに書いても結構です）

▼読解マラソンのページから答えを送信する場合（この場合作文用紙に答えを書く必要はありません）
http://www.mori7.net/marason/ki.php

1.

2.

3.

4.

5.

洞察やひらめきによって今まで見えなかったことが弁別できる、わからなかったことが腑に落ちるということは誰でも経験することである。しかし、だからこそ、私たちはそこに介在している暗闇への跳躍に驚くことを忘れ、ついつい陳腐な数直線的時間観へと自分の生を写像してしまう。

しかし、本来、生というものは「一瞬先はわからず」「一瞬前は取り返しのつかない形で確定している」ということの繰り返しであり、そこに最大の驚異があるはずだ。たとえ一日の短い時間の中でも、不確定から確定への跳躍がその中にいくつあるかということをも思えば、そこには真に瞠目すべき私たちの人生の、そして意識の流れの属性がある。(中略)

無限というものを、一気に俯瞰できるようなその仮想の実体においてとらえるのではなく、可能体においてとらえること。1、2、3、……という自然数の数え上げにおいて、ある数の次にまた数があるということ自体が無限を保証しているように、私たちの生もまた、この瞬間の次に何が起こるかかわらないという点において無限を保証されているというのを直視すること。たとえ、その不確定性の中に自らの死というアクシデントが含まれていたとしても、その死への自由をも含む「何が起こるかかわらない」という事態こそが、自然数の数え上げのごとき可能無限を担保する。

一日のうちに含まれる可能無限と、長き一生のうちに含まれる可能無限は、その質において同等である。そのような覚醒と覚悟を持って生きる時、永遠の命とは決して数直線のようなメタファーの中にとらえられるものではないということが首肯される。

死の床に就いた人の哀しみは、「次の一瞬に何が起こるかかわらない」という意味での不確定性の幅が次第に狭まっていく点に由来する。確定したものである未来の出来事を知ってしまった男が直面するであろう自由意志のパラドックスとどこか似ている。たとえ残りの時間が物理的な意味において少ない場合でも、「次に何が起こるかかわらない」という不確定から確定への跳躍のときめきを

胸に秘する限り、私たちは無限のオーラに包まれて生きることができ。死という文脈が次第に自分の身体をがんにがらめにしてしまっていく時、私たちはかつて自分が持っていた自由意志という幻想が劣化し、不確定性の白い光が次第に弱まっていつてしまうことを存在の奥底から哀しむ。

創造性とは、つまり、未来はあらかじめ読めないということのもっとも純粹なる表現である。世界が今までとは違った場所に見えるということ。そのような認識論的革命への志は、生きる衝動の素直な表現になる。だからこそ、ピカソやアインシュタインといった創造者は、生を本来の意味において全うしているように見える。

カフカがその小説の中で描くような形式主義に従う情性の人か、もはや生きてはいないように思われるのは、不確定から確定への跳躍の欠如においてである。跳躍への感性が失われる時、人生は本来に有限のものになってしまう。

現代の脳科学は、感情を不確実性への適応戦略としてとらえる。しかし、不確実性を、アンサンブル(集合)の要素の完了した数え上げの結果としての確率論の枠組みでとらえている限り、生の一回性の本質をつかみとることはできない。

かつて、神はサイコロを振らないとアインシュタインは言った。確率論的世界観と、決定論的世界観の間の齟齬は、量子力学の観測問題を初めとして、いまだ解決されていない困難な問題のいくつかに接続している。生における一回性を、可能無限の一つの表現として見る時、そこには明らかにまだ考え詰められてはいない思考の豊饒への入り口がある。その抽象的思考は、ランドセルを初めて背負った幼き自分の生の切なき一回性を引き受けることにもつながっているはずだ。

不確定から確定への命がけの跳躍に寄り添う時、太陽が地平線に沈む一瞬を見る人の心にも無限は訪れる。

(茂木健一郎『思考の補助線』)



1 生物の遺伝的複製技術という意味でのクローニングは、衝撃ではない。誰でも知っている、植物のいちばん簡単なクローニングは、「さし木」というかたちである。動物の場合は、さし木というわけにはいかないが、体の一部分から全体が再生するものはいる。2 人間も含めた脊椎動物にとって、最も身近なクローニングは、一卵性双生児である。それほど頻繁に起こるわけではないが、しかしひとつの受精卵に由来し、しかも同一の子宮で育つ一卵性双生児が存在することは、古くから知られている自然界の出来事である。3 この点では、細胞の核移植により作られ、母親とは別の胎内で育てられてできている羊や牛のクローンなどよりも「完璧な」クローンであると言える。

4 羊や牛のクローニングが社会的に衝撃を与えたのは、言うまでもなく動物の核移植クローニングという技術が、人間にも応用されるのではないかと、そして、ひとりの人間から、大量にコピーが作られるのではないかという憶測と危惧のためである。5 同じ遺伝子だから同じ人格が作られるという憶測である。一卵性双生児でさえ、それぞれに独立した別個の人格を認めていることを考えれば、このような遺伝子決定論が間違いであることは明白である。6 にもかかわらず、人間の大量コピーというイメージが一般化したのは、特に合衆国において、遺伝子を絶対視し、環境因を軽視する傾向があるためでもある。7 このことをステイヴン・J・グールドは、「生まれ」に氣をとられるばかりに「育ち」の重要性を見落としている社会の危険性として早々と指摘していた。

8 「ドリー」のニュースをはじめ、その後各国で報じられるクローニング成功のニュースに接するたびに、わたしの脳裏に浮かびあがる「複製」のイメージがある。一九九三年（平成五年）秋、伊勢神宮で見た光景である。9 この年は二十一年に一度の「式年遷宮」の年にあたるが、そのクライマックスである「遷御」の日、内宮のなかを撮影しながら、日の落ちる時刻まで歩いたことがあった。0 二十一年ごとに御正殿をはじめ、神宮すべての神殿から神宝

までを新しく作り替える「式年遷宮」は、簡単に言えば神々のお引越であるが、わたしには、それが形態的には一種の複製の儀式のように見えたのである。建築的には耐用年数にいたらない二十年というサイクルで、いつさいの神殿がまったく同じ技法と形態のもとに作り替えられる理由については、いくつもの説があるが、現実的な意味で説得力があるのは、「唯一神明造」と呼ばれる建築様式の知識と技法を伝承してゆくための期間として、二十年が適当であったのではないかというものである。確かに平均寿命が現在よりもずっと短かった時代に、親から子へ、複雑で精緻を極めた建築技法を伝えるには、十年では短かすぎ、かといって三十年では長すぎたのかもしれない。いずれにしても、「式年遷宮」という儀式の二十年という社会的時間が、世代間の知識の伝承という時間に関係しているという説は、できたばかりの白木の神殿をレンズ越しに眺めながら、すんなりと受け入れることができたのだった。（中略）

「式年遷宮」における広い意味での様式の「複製」は、その背後に人生と社会が取りもつ「時間性」があるが、核移植クローニングによる人間の「複製」には、この「時間性」が欠落している。クローンである親から生まれた再クローンの牛が誕生している今日、クローニングを重ねるごとに、細胞が若返る可能性があるという研究報告さえ出てきているが、結果の当否は別にして、現在わたしたちが目当たりしているクローニングとは、これまでの生物が性を介して営んでいた「時間性」に、根本的な変更を要請するものではないだろうか。クローニングの登場によって「適齢期」という言葉が死語になるとは思わないが、しかしおしなべて生物は、「しかるべきときに、しかるべきことを」しながら世代を継いできたのだ。それは「しかるべきときに、しかるべきことを」という性の規則を、時間性として社会に組み込んできた人間にとって、「適齢」の意味を改めて問い直させるものではないかと思う。

（港千尋の文章）



一九二〇年代は弁士の黄金時代である。彼らはフィルム物語をなぞるというよりも、ときに即興的な説明をもつて逸脱を行ない、観客の物語受容による映画体験を自在に操作した。観客はフィルムよりも弁士の人気や好みに応じて、映画館に通った。邦画に關していえば、弁士たちは映画の制作者に対して、自分たちのパフォーマン스가効果的になされるように、注文をつけることさえできた。こうして日本映画はハリウッド（およびそのシステムに追隨する世界中の映画界）とは別のシステムのもとに、独自の発展を続けた。

だが一方で、特權的な声のもとに観客を自在に操作できる弁士という存在は、きわめて政治的な役割を担うこともあった。植民地下の朝鮮では、しばしば『国民の創生』（グリフィス、一九一五）や『十戒』（C・B・デミル、一九二三）の解説を務めた弁士が観客にむかつて民族主義を昂揚させるような演説を挿入し、立合いの日本人警察官に中止を求められた事件があった。日本ではある時期から弁士は免許制となり、国民に忠孝の愛国思想を訓導することを要求されるようになった。

一九一九年前後に「キネマ旬報」をはじめとする多くの映画雑誌が創刊されると、そこに集まった知識階層の批評家たちはいつせいに弁士制度を攻撃した。彼らの説によれば、弁士はフィルムが本来的にもっている物語をいとも軽々しく変形してしまい、平気で余計な脱線（だせん）をよしとしてしまう、映画の破壊者ということになる。しかも彼らは西洋文化に無知であるため、説明に間違いが多い。無声映画はそれ自体として芸術的に完成しているべきなのに、それを落語や講談に近いものに引きずりおろしてしまふ。したがってもしどうしても弁士が必要であるというのなら、あくまでもフィルムの補足説明の域を脱してはならない、との主張である。なるほど、こうした批判に應えて、弁士のなかには単に補足説明に徹しようとした動きも、あるにはあった。しかしながら、大衆の好みはどこまでも文飾（ぶんしやく）多く、声の表情の豊かな弁士に集まった。映画評論家が弁士にかくも苛（いら）だした原因は、今から見ればあきらかである。弁士が

（文字言語による批評の対象たるべき）フィルムのテキストを、一義的に決定することを大きく妨（さまた）げているからだ。

現在の地点に立つならば、少なくとも次のことがいえる。

弁士は単純に先行して存在するフィルムを従属的に解説する人物ではなく、むしろフィルムを歪曲（わいよく）しながら破壊（はかい）してしまふ存在であった。彼は観客の映画体験を自在に操ることができたばかりか、制作サイドに対しても一定の発言権をもち、日本映画を、無声の自己完結をもつてよしとするハリウッド映画とは異なった方向へと発展させるのに効があった。リュミエール以来、映画がすべからず表象の次元（じゆん）で止まっていたとき、唯一（ゆい）日本だけが表象を越えた現前の次元（じゆん）に到達できていたとすれば、それはひとえに弁士があつてのことである。そして、こうした事実は日本人の映画体験を確実に独自のものにしていく。なんとすれば、彼らはまずフィルムよりも弁士によって、観に行（く）作品を決定したからである。弁士の発明は日本文化にとつて、漢字から平仮名やカタカナを発明したことに匹敵（ひつてき）するほど意味のあることではなかっただろうか。（中略）

弁士の時代はもうとうに過去のものになったと、一般的には信じられていた。しかし、映像を素材とするパフォーマーと考え直した場合、このジャンルには映像テクノロジー時代を生きるわれわれの求める、新しい演劇様式の可能性（ねむ）が眠（ひそ）んでいることは否定できない。現在、日本には、松田春翠（しゅんすい）の弟子でただ一人、澤登翠（さわとみどり）という弁士が存在している。

（四方田犬彦『映画史への招待』）



1 文明とは何かを地球システム論的に考えると、「人間圏を作って生きる生き方」となります。人間圏の誕生がなぜ一万年だったかというのには、気候システムの変動に関わってきます。**2** 気候システムが現在のようないくつかの安定してきたのは一万年前のことです。それに適応してその頃、我々はその生き方を変えたんですね。

3 人間圏を作って生きる生き方というのは、じつは農耕牧畜という生き方です。それ以前、人類は狩猟採集という生き方をしていた。

狩猟採集というのはライオンもサルも、あらゆる動物がしている生き方です。**4** したがってこの段階までは人類と動物の間に何の差異もなかった。これを地球システム論的に分析すると、生物圏の中の物質循環を使っていた生き方ということになります。生物圏の中に閉じた生き方です。

5 それに対して農耕牧畜はというと、たとえば森林を伐採して畑に変えると、太陽からの光に対するアルベド（反射能）が変わってしまう。ということは、地球システムにおける太陽エネルギーの流れを変えているわけです。**6** また、雨が降ったとき、大地が森林でおおわれているときと畑とではその侵食の割合が異なります。別の言葉でいえば、そこに水が滞留している時間が違ってくる。すなわち、エネルギーの流れだけではなく、地球の物質循環も変わるということです。**7** これを地球システム論的に整理して概念化すると、人間圏を作って生きるということになる。人類が生物圏から飛び出して、人間圏を作って生き始めたために、地球システムの構成要素が変わったわけですね。

8 ところで、先ほど一万年前に人間圏ができたのは気候が変わったからだと言いました。そういう時期は最近の一〇〇万年くらいをとっても何回かあったでしょう。**9** 人類の誕生以来の歴史七〇〇万年ぐらゐまで遡ってみれば、一万年前と同じような時期が何度もあったはずですから、たとえばネアンデルタール人が農耕を始めてもよかったことになる。でも、彼らはそうしなかった。**0** 農耕牧畜という生き方を選択し、人間圏を作ったのは、われわれ現生人類

だけなんです。

それはなぜなのか。現生人類に固有の、何か生物学的な理由があるのではないかと考えられます。類人猿や他の人類にはなく、我々だけがもっている特徴は何だろうと考えると、まず思い当たるのは「おばあさん」の存在です。おばあさんとは、生殖期間が過ぎても生き延びているメスのことです。たとえば、類人猿のチンパンジーのメスと比べても、現生人類のメスは生殖期間終了後の寿命が長い。なおこの場合、オスは関係ありません。オスは死ぬまで生殖能力があります。したがって、おじいさんは現生人類以外にも存在します。しかし、おばあさんは他の哺乳類には存在しないし、ネアンデルタール人の化石からも、現生人類のおばあさんに相当する骨は見つかっていません。おばあさんの存在は、現生人類だけに特徴的なことなんです。

では、おばあさんが存在すると何が起こるのか。すぐに思いつくのは、人口増加です。なぜかというと、おばあさんはかつて子供を産んだ経験をもつわけですから、お産の経験を娘に伝えることができます。するとお産がより安全になり、新生児や妊婦の死亡率も低くなりますね。

さらにおばあさんは、娘が産んだ子供のめんどろもみまします。たとえば娘の生殖期間が一五年として、子育てに五年かかるとしたら三人しか産めない。ところがおばあさんがいることで五年が三年に短縮されたら五人産める。ということと、おばあさんの存在が人口増加をもたらしただけではないかと、私は考えています。このことは最近の研究からも確かめられています。

我々現生人類は一五万年ぐらゐにアフリカで誕生したのですが、五、六万年ぐらゐには、すでに地球上に広く分布するようになっていました。人類のような大型動物が、なぜこんな短期間に世界中に拡散していったのか。これも現生人類の人口増加という問題を考えるとその理由が判ります。

（松井孝典『松井教授の東大駒場講義録』）



33 32 31 30 29 28 27 26 25 24 23 22 21 20 19 18 17 16 15 14 13 12 11 10 09 08 07 06 05 04 03 02 01

66 65 64 63 62 61 60 59 58 57 56 55 54 53 52 51 50 49 48 47 46 45 44 43 42 41 40 39 38 37 36 35 34

言語の階層化については、デイヴィッド・グラッドの著書（一九九九）によくまとめられている。それによると、世界の言語階層の頂点は英語である。事実、英語は、現在世界で最もよく普及し、最も広く利用されている。世界は、いま、英語に向かって集中の度合いを高めている。「言語帝国主義」という概念が広まってからすでに一〇年以上が過ぎたが、英語への一極集中は治まる気配がない。逆に、共通語としての期待が、ますます大きくなっている。英語は、成功の階段を駆け上がるための手段と見なされているのである。

言語の国際市場は、いま、英語の売り手市場であり、世界はその反応に追われている。言語政策も外国語教育も、主役はいつも英語である。通貨にたとえるなら、英語は、国際市場での基軸通貨である。他の言語は、国内通貨としては何の不足もないが、国際市場では自由に身動きできない。その価値は、英語との交換比率によって決定される。いま世界は、この新しい価値観に振り回されながら、基軸通貨の確保に躍起になっている。

交換価値の低い言語の話し手は、競って英語の学習に精を出す。一方、英語を話す人は、最初から基軸通貨を手に入れているので、取引相手に対して有利な立場にある。アメリカ人やイギリス人が一般に外国語学習に不熱心である理由の一つが、ここにある。

外来語の世界も、グローバルゼーションと言語の階層化の影響を正面から受けている。どの言語も、外来語としての英語の助けなしには、日常的なやりとりさえ支障を来すようになっていく。英語嫌いである有名なフランス語の場合も例外ではない。英語からの流入が少ないとされていたトルコ語にも、同様の変化が起こっている。日本語に至っては、説明の必要はないだろう。

いま、外来語市場で取引の中心となっているのは、英語である。こ

こもまた、英語の売り手市場の様相を呈している。他の言語は、自分たちの商品化をあきらめてしまった。英語という商品を買った方が便利なのである。なにしろ、どこでも手に入り、どこでも通用するのだから。こうして、たいいていの言語が、入超になった英語によって変容を迫られることになる。

現在の世界は、英語の影響から逃れることはできない。どの言語においても、外来語としての英語はふえ続けるだろう。それを懸念する向きもあるが、単純に異を唱えることも難しい。言語は、他の言語との接触を通して豊かになる面があるからである。明治以来の日本語の成長を見ればよくわかる。それに、フランス語やドイツ語のように、すでに大言語としての地位を築いている言語の場合、英語の流入によってその構造が歪められるということは起こらない。しかし、発展途上国の言語の場合は、事情が違ふ。近代語彙が大きく不足している言語は、その分、大言語、とりわけ英語への依存度が高くなるからである。

この文章の初めに、心理的な越境こそが鍵になる、と述べた。外来語への対応も、その例外ではない。地球上に純粋な言語などというものは、ほとんど残っていない。言語に成長があると仮定すると、その成長は、異質の言語の存在によって促進される。一方で、言語によつては、他の言語と接触したために衰退し、極端な場合は死に至ることさえある。ロバート・デイクソン（二〇〇二）は、「小さい言語が生き残る唯一の現実的な方法は、話者が他の世界から隔絶された状態にいること——ニューギニアや南アメリカの密林の中にとどまることだ」と述べている。（中略）

いま、世界の言語は、英語という外来語によって変容を迫られている。英語自身は、これまで外来語に対してきわめて寛大であった。現在の英語は、三五〇以上もの異なった言語からの流入語を含んでいる（デイヴィッド・クリスタル、一九九五）。その雑種性は、世界のどの言語も対抗できないほどだという。その雑種言語である英語が、グローバルゼーションの旗手として、世界の言語にその雑種性をもち込もうとしている。

（山田雄一郎『外来語の社会学』）



1 研究に限らず、大事業の成功に必要な三要素として、日本では昔から「運・鈍・根」ということが言われている。科学者の伝記を読むと、その人なりの「運・鈍・根」を味わうことができる。

2 「運」とは、幸運（チャンス）のことであり、最後の神頼みでもある。「人事を尽くして天命を待つ」と言われるように、あらゆる知恵を動員することで、逆に人の力の及ばない運の部分も見えてくるようになる。3 人事を尽くさずにボーッとしているだけでは、チャンスを送るのが関の山。運が運であると分かることも実力のうちなのだ。

4 次の「鈍」の方は、切れ味が悪くてどこか鈍いということである。最後の「根」は、もちろん根気のことだ。途中で投げ出さず、ねばり強く自分の納得がいくまで一つのことを続けていくことも、研究者にとつて大切な才能である。5 論文を完成させるまでの数々の自分の苦勞を思い出してみると、「最後まであきらめない」、という言葉に尽きる。山の頂上をめざす登山や、ゴールをめざすマラソンと同じことである。

6 それでは、なぜ「鈍」であることが成功につながるのだろうか。分子生物学の基礎を築いたM・デルブリュックは、「限定的いい加減さの原理」が発見には必要だと述べている。

7 もしあなたがあまりにいい加減ならば、決して再現性のある結果を得ることはなく、そして決して結論を下すことはできません。しかし、もしあなたがちよつとだけいい加減ならば、何かあなたを驚かせるものに出合った時には……それははつきりさせなさい。

8 つまり、予想外のことがちよつとだけ起こるような、適度な「いい加減さ」が大切なのである。このように少しだけ鈍く抜けていることが成功につながる理由をいくつか考えてみよう。

9 第一に、「先があまり見えないうちがいい」ということである。頭が良く先予想がすぎると、結果のつまらなさや苦勞の山の方にはかり意識が向いてしまつて、なかなか第一歩を踏み出しにくくなるからである。0

第二に、「頑固一徹」ということである。「器用貧乏」や「多芸は無芸」とも言われるように、多方面で才能豊かな人より、研究に

しか能のない人の方が、頑固に一つの道に徹して大成しやすいということだ。誰でも使える時間は限られている。才能が命じるままに小説を書いたりスポーツに熱中したり、いろいろなことに手を出してしまつと、一芸に秀でる間もなく時間が経つてしまう。私の恩師の宮下保司先生（脳科学）は、「頑固に実験室にこもる流儀」を貫いており、私も常にこの流儀を意識している。

第三に、「まわりに流されない」ということである。となりの芝生はいつも青く見えるもので、となりの研究室は楽しそうに見える、いつも他人の仕事の方がうまくいっているように見えがちである。それから、科学の世界にも流行廃りがある。「自分は自分、人は人」とわり切つて他人の仕事は気にかけず、流行を追うことにも鈍感になつた方が、じっくりと自分の仕事に打ち込んで、自分のアイデアを心ゆくまで育てていけるようになる。

第四に、「牛歩や道草をいとわない」ということである。研究の中では、地味で泥臭い単純作業が延々と続くことがある。研究は決して効率ですべてではない。研究に試行錯誤や無駄はつきものだ。研究が順調に進まないで、せつかく始めた研究を途中で投げ出してしまいがちである。成果を得ることを第一として、スピードと効率だけを追い求めていては、傍らにあつて、大発見の芽になるような糸口を見落としてしまうかもしれないのだ。（中略）

頭のいい人は批評家に適するが行為の人にはなりにくい。すべての行為には危険が伴うからである。怪我を恐れる人は大工にはなれない。失敗を怖がる人は科学者にはなれない。（中略）

頭がよくて、そうして、自分を頭がいいと思ひ利口だと思ふ人は先生にはなれても科学者にはなれない。人間の頭の力の限界を自覚して大自然の前に愚かな赤裸の自分を投げ出し、そうして唯々大自然の直接の教えをのみ傾聴する覚悟があつて、初めて科学者にはなれるのである。

（酒井邦嘉の文章）



タクシーに乗って、運転手と会話を交わす。そのような時、私たちは、当たり前障りのない話題を選ぶ。今年のプロ野球はどうだとか、最近景気はどうですかとか、だれでもある程度興味を持つような、そしてあまりプライベートなことにかかわらないような話題について、いつ止めてもいいような形で会話を交わす。このような時、多くの人にとって、タクシーという、見知らぬ他人がいきなり密室の中で一緒にあって五分や十分の時間を過ごさなくてはならないという状況でしか生まれないような「モード」あるいは「パーソナリティ」が現れる。だからこそ、私たちは、タクシーを降りた時に、「今まで快活な会話を交わしていたあの私は何なのだろうか？」という疑問とともに、「ふーっと」「我に返る」ような感覚を持つ。

私たち人間は、その日常におけるふるまいをじっくり観察してみると、必ずしも常に同じ「自分」を貫いているわけではない。友人としゃべっている時、恋人としゃべっている時、学校や会社の同僚としゃべっている時、コンビニの店員としゃべっている時、迷子の子供に名前を聞いている時、ホテルに予約の電話をかける時、……それぞれの時に、少しずつ異なる自分が立ち上がっていることは、少し自省してみれば、明らかなことだろう。このように、状況に応じて少しずつ異なる自分が立ち上がることを、私たちは通常「ふり」をするとは言わない。「ふり」をするということは、「よいカードが来たのにポーカーフエースをする」、「誰かのマネをする」、「知っているのに知らないふりをする」など、かなり意図的に自分の行動を偽装する場合に限られると普通は考えられている。しかし、私たちの日常の行動を観察してみると、実はそのような意図的な場合以外にも、あらゆる場面において普遍的に「ふり」が成立していることがわかる。以上のようなことを考えると、「ふり」をするということを、「意図的に何かのマネをする、意図的に何らかの心の状態を偽装する」というような狭い意味でとらえるのではなく、より広い意味で再定義する必要がある。その際、鍵になるのは、「そうしないこともできるのに、そうしている」ということである。タクシーの運転手と会話している時、私たちは愛想よくプロ野球の会話をしないでおこうと思えばそうできるのに、会話している。もちろん、「そう

しないこともできる」という可能性を、常に意識しているわけではない。意識した場合には、より狭義の「ふり」(pretend)に近いと言えるが、意識していない時も、狭義の「ふり」をすることに近い何か認知プロセスとして進行しているのである。

「そうしないこともできるのに、そうしている」というのは、まさに、子どもが「ごっこ遊び」をしている状況にあてはまる。怪獣のふりを止めようと思えばいつでも止められるのに、あえて、「ガオー」とか、「やられたあ」などと叫ぶ。端から見れば、なんでそんなことをしているのだろうと思えないわけでもない。しかし、同じことは、「ごっこ遊び」とは一見無関係な、タクシーの中や、学校の授業や、会社や、家庭や、電車の中や、それこそ人間社会のありとあらゆる場面で見られる。

母親は、母親でないようにふるまうこともできるのに、子どもを前にすると、あたかも母親のようにふるまう。同じ母親が、学生時代の同級生と喫茶店で会う時は、キヤツキヤツと笑ってまるで女の子のようになる。だったら、なぜ、自分の子どもを前にキヤツキヤツと笑ってまるで女の子のようになるのかといえ、まさに「そうしないこともできるのに、そうしている」、あるいは、もっと強い何らかの力によって、母親であるという「ふり」を、半ば無意識のうちに自然にしている(させられている)のである。

このように考えれば、「そうしないこともできるのに、そうしている」という意味での「ふり」という現象は、それこそ朝起きてから眠るまで、人間が生活している現場で常に起こっている普遍的な現象であるということがわかる。さまざまな「ふり」の間を柔軟に行き来できるということが、私たち人間のすぐれた特性であると言うこともできるのである。

(茂木健一郎の文章)



33 32 31 30 29 28 27 26 25 24 23 22 21 20 19 18 17 16 15 14 13 12 11 10 09 08 07 06 05 04 03 02 01

66 65 64 63 62 61 60 59 58 57 56 55 54 53 52 51 50 49 48 47 46 45 44 43 42 41 40 39 38 37 36 35 34

新しい言葉の指す新しい事柄を人はどうやって理解するのか。そこにはほとんど常に、既知の事柄へのなぞらえという作業があるのでないだろうか。こうした観点から「なぞらえ」が人の概念体系の根底にあることを説くのがレイコフとジョンソンである。

彼らの共著『レトリックと人生』の主旨を一言で要約するなら、

「われわれが普段、ものを考えたり行動したりする際に基づいている概念体系の本質は、根本的にメタファーによって成り立っている」ということである。彼らの言う「メタファー」は表現技巧としての隠喩ではない。理解や思考のための方略である。彼らの規定によれば「メタファーの本質は、ある事柄を他の事柄を通して理解し、経験することである」。この「メタファー」を日本語にするならば、「隠喩」よりも「なぞらえ」という方が適切であろう。即ち彼らのメタファー論とは、なぞらえ論にほかならない。「筆者らは人間の思考過程の大部分がメタファーによって成り立っていると言いたい」という彼らの主張は、人の思考がロゴスよりも「なぞらえ」に依存しているということである。

彼らは「概念」を、「固有の属性」によって定義されるものではなく、むしろ各人にとっての意味であり、従って各人が理解しているもののことであると考ええる。そして、ある概念についての私たちの理解は、その大部分が他の概念へのなぞらえによってなされているとする。ただし、それは一観念を他の一観念と比較することではない。「理解というものは、経験の領域全体に基づいて生ずるのであって、個々の観念に基づいて生じるのではない」からである。言い換えれば、私たちが理解するものはコトの経験という全体であって、個々の観念はその構成要素にすぎない。むしろ観念はそのコトの中に位置づけられることによって意味を得るのである。「なぞらえ」とは、既に理解済みの経験領域に基づいて未知の経験領域を理解することである。そこで理解されるものは、二つの領域に共通する経験の「型」である。これをレイコフらは「経験のゲシュタルト」と呼ぶ。「なぞらえ」とは、ある領域に、別の領域の「経験の

ゲシュタルト」をあてはめて、その事柄を理解することなのである。たとえば「議論」についての理解は「戦争」のメタファーに基づいていると彼らが言うとき、それは議論というコトの経験の領域全体、即ち開始があり、敵と味方があり、攻撃と防御があり、勝利と敗北があるという、議論経験の全体が「戦争」と同じ構造をもつものとして理解されているということである。さらにレイコフらは言う。

「重要なことは、私たちは単に戦争用語を用いて議論のことを語っているだけではないということである。議論には現実に勝ち負けがあり、議論の相手は敵とみなされ、相手の議論の立脚点（＝陣地）を攻撃し、自分のそれを守る。優勢になったり、劣勢になったりする。戦略をたて、実行に移す。自分の議論の立脚点（＝陣地）が守りきれないとわかれば、それを放棄して新たな戦線をしく。議論の中でわれわれが行うことの多くは、部分的ではあるが戦争という概念によって構造を与えられているのである。」

もちろんレイコフらが念頭においているのは英語の「議論」の概念だが、日本語でも事情は変わらないだろう。もともと文化が違えば概念が違ふことはありうる。そこで彼らは「議論」を「ダンス」のメタファーによって理解している文化を想像してみる。論者は踊り手とみなされ、議論の目的は見た目に美しく論じあうことになる。多分人々は議論について「息が合わない」とか「創造性に乏しく単調だ」とか「中だるみはあったが最後はうまく決まった」などと語るだろう。そして言うまでもなく、概念の異なる文化においては、行動も異なるであろう。

「われわれは議論を戦争とみなし、戦争をするような議論の仕方をするが、彼らはダンスとみなして、ダンスをするような仕方議論をする、ということになるであろう。」

私たちの概念のほとんどは、他の概念への「なぞらえ」によって理解されているということである。従って、私たちの概念体系は「なぞらえ」を原理として構築されているということである。

（尼ヶ崎彬の文章）



怠け者でいくじなしのび太は、ドラえもんの道具さえ使えば何でもできると思い、ますます努力を怠る傾向がみえる。ドラえもんの道具に依存症を示し、ドラえもんはそれを嘆きつつも、友であるのび太に奉仕せずにはいられない。いつも最後にはのび太が道具の使い方を誤ったり、悪用して問題を引き起こし、しつぺ返しを受ける。どんなにすぐれた道具を与えても、誤用し悪用するのはいつも人間だというのだ。底知れぬ力を秘めた道具を不用意に貸し与えたドラえもんがとがめられないという問題はあるにしても、人間のドラえもんに対する絶対的な信頼は、ここに起因している。

アトムはことあるごとに自ら飛んで行って、すべて自分一人でやろうとする。それは、ひとつの動力から発生する力を歯車やベルトコンベアで分配して使うのと同じ発想で、アトムは工業時代の原理を体現している。しかし、力だけならばロボットの助けを借りるまでもなく、ガンダムのバトルスーツや『エイリアン2』のパワー・ローダーのように、自己の力を増幅する方法を既に人間は思いついている。または『ロボコップ』のように自分をサイボーグ化する方法もあるかもしれない。

一方、ドラえもんは自分が何かを行うのではなく、心を持ち合わせていない道具に機能を託して、それを人間に使わせる。アトムは何かをなす判断を自らが下したが、ドラえもんは道具の機能に精通し、必要な道具を取り出して、その使用方法を説明するだけだ。その意味では、ドラえもんは最上のマニュアルであり、生き字引ならぬ生きマニュアル、ウオーキング・マニュアルなのだ。道具を使用するかどうかの判断は、あくまでも人間に委ねている。ドラえもんの場合には機能を道具化することによって、心をもった人工物のフェイル・セーフを施しているのである。アトムにはそれが欠落していた。

最近ではSFが、科学技術に遅れをとった裏返しとして、過去の技術に注目するようになってきている情報技術の革命を経験することなく、過去の蒸気機関や時計かけの技術がそのまま発展していたらどうなっていただろうかという設定の作品が増えていく。こういった設定を、サイバーパンクに引っかけた「スティームパンク」と呼ぶらしい。この種の古典としてはいうまでもなく『メトロポリス』があるが、最近のスティームパンクの作品としては、ウィリアム・

ギブスンとブルース・スターリングの『デイファレンス・エンジン』、宮崎駿の『天空の城ラピュタ』、ティム・バートンの『シザーハンズ』などがある。『バック・トゥ・ザ・フューチャー3』の蒸気機関車のタイムマシーンや、『未来世紀ブラジル』にも、スティームパンクの傾向が表れているし、古いところでは

チエコスロヴァキアの映画『悪魔の発明』がある。スティームパンクが描く古風な機械は、機能が顕在化しているので視覚化しやすい。スティームこそ出していないが、ロケット噴射で実際に移動をして、せつせと活動している姿を描く『鉄腕アトム』は、スティームパンクなのかもしれない。

コンピュータを使いやすくするために、エイジェントというものが提唱されている。一九八八年にアップル・コンピュータ社が未来のマシーンを構想して視覚化したビデオクリップ「ナレッジ・ナビゲーター」では、エイジェントが使われていた。蝶ネクタイをした男性の秘書がディスプレイ上に現れて、外部データベースを検索したり、かかってくる電話を選別する。

人工知能を利用した一種の秘書であるが、あえてエイジェントと言って人工知能と区別しているのは、決断はあくまでも人間が行なうからである。本人の代理としてエイジェント同士で会話した場合、どうなるのかという気がするが、エイジェント同士での取りきめはできないようになっていくのだろう。エイジェントは使用中に利用者の特性を記憶してゆく。エイジェントを「雇用」する利用者は、特定の個性を持つエイジェントを選ぶことができる。

高度成長時代の担い手が、テクノロジの粋を集めたロボット、鉄腕アトムを見て育ったように、われわれの子どもは、すべてを成し遂げるエイジェントであるドラえもんを見て育っている。『鉄腕アトム』がロボットに対する心理的抵抗をなくした後、日本ではロボットが急速に普及した。それと同じように、ドラえもんはエイジェント普及を先導しているのだろうか。

（浜野保樹『中心のない迷宮』）



人の生活を支えるシステムには、不如意なことや予測し得ないことが起きても対処できるような仕組みが、本来あるはずだ。ところが、昨今の事件に対する社会の反応を見ると、この柔軟性を欠いているように強く感じる。

例えば、小学校に変わり者が乱入した。すると、変わり者がいつ現れても大丈夫なように、警備員を配置し、登下校には親が付き添い、絶対に再発しない形を目指す。台風で窓が割れないようにと、窓のない家を作るようなものだ。

いつ何が起るかわからないシステムは信用しないことにしようという方向に、社会全体が進んでいる印象を受ける。しかし、いつ何があるかわからないけれどもまず信用する、というのが人間関係の基本であるはずだ。薬と言われれば、プラシーボ（偽薬）効果で、うどん粉も効くことがある。信用が根底にない社会は悪事を増やす一面がある。

本来めざすべき形は、子供たちがよりよい環境の中で、自然とも地域の人間とも親しみつつ、教育の成果を上げることではないか。ところが、いざことが起ると、泥縄式に、すべてを変えようとする。

この傾向は、世の中全般に見られる。例えば、今月の目標値を定めると、数字が独り歩きし、それに達しないと満足できなくなる。本当に大事なものは取り決めではなく、取り決める時の状況。しかも状況は刻一刻と変わる。今の状況では、その時決めた数字はおかしいかも知れないのに、顧みることもない。

例外的なことが起こっても揺るがないシステムが、かつての日本にはあった。それを私は「やおよろず的」と呼んでいる。いろんな価値観の並立を認め、いろんな考え方があっていいんじゃないのという寛容心に包まれた社会だ。

パソコンで言うと、日本人のベースにあった基本ソフトが「やおよろず」ソフトだった。「和魂洋才」と称し、外国の様々なアプリケーション（応用）ソフトを持ってきて使えた。キリスト教は悪と言っているが、イスラム教ではどうも違うぞ、という風に。

今、この基本ソフトの教育がないまま、応用ソフトばかりをたた

きこまれた弊害が、一挙に噴出してきている。多様なものを単一化、画一化するという形で。企業は経済原理だけで合併を進め、政治も単一化につぐ単一化。個人のレベルでは、アイデンティティー（単一の個性）によって縛られる。統一的なアイデンティティーを前提にする、そこからはみ出すものは異常、となってしまう。人格の「ゆらぎ」を誤差として認めない。

ただ、「やおよろず」的な時代に時計の針を戻すことはできない。まず行うべきは、カオス（混沌）としての自然や身体を見直すことではないか。現代社会は、「身体」をあまりにも軽視している。日本語では、「身」「心」という。「身」には「心」が混じっているし、「心」には裏付けとして「身」が含まれる。相互に重なりあっている、西欧の精神・肉体の二元論とは全く違う。これが日本の独自性だ。

「あいまいさ」は日本人の欠点のように言われてきたが、「身」によって伝わるものが共通認識としてあるからこそ、「心」を全部言語化しなくても分かり合えるということだ。共通認識の部分が、論理ですべてを理解しようとするロゴス（理性）主義の西欧人より広い。欠点ではない。自信を持つていい。人間は自然の一部。人間そのものもまた、大いなる自然。自然そのものに矛盾はないが、自然を解釈しようとする人間の頭の中に矛盾が生まれてくる。自然の本質はカオスだから、ロゴスでは説明がつかない。何をするか、何が起きるかわからない自然というものを前提に、借り物でない、日本の実情に見合ったシステムを作り直す必要がある。

あまりに強く因果律にしばられた効率重視の社会を越えるものの一つが遊びだろう。禅には「遊戯」という言葉がある。何かをして、それに見合った結果を後に期待するのではなく、今していることの中に楽しみを見いだし、人生の喜びにかえてしまおうという考え方だ。七福神の精神をご存じだろうか。なぜ七福神がめでたいかという、あの7人はどんな問題をぶつけても、必ず意見が割れるから。その代わり、6人が反対しても必ず1人は賛成してくれる。

「おれは違うけど、お前も面白いね」と言って笑い合う態度。
（玄侑宗久「信頼喪失社会を語る」『読売新聞』）



33 32 31 30 29 28 27 26 25 24 23 22 21 20 19 18 17 16 15 14 13 12 11 10 09 08 07 06 05 04 03 02 01

66 65 64 63 62 61 60 59 58 57 56 55 54 53 52 51 50 49 48 47 46 45 44 43 42 41 40 39 38 37 36 35 34

耳にピアスをしている若者が目につくようになって久しい。以前は女性でさえイヤリングはしてもピアッシングまではしなかったものが、最近ではピアスをしている男性が少しもめずらしくなくなってきた。

ことは日本に限らない。中国にはつい五十年ほど前まで弁髪もあつたし纏足もあつた。西洋にしたって同じだ。三百年ほど前には、たとえば女性は額を大きく削り上げていたのである。コルセットにいたっては今世紀初頭まで残っていた。身体を傷つけないことこそ文明であると思なされるようになったのは、つい最近の出来事にすぎなかったわけである。おそらく、十八世紀の啓蒙主義以降のことと言って大過ないだろう。その段階で文明に関する考え方が大きく変わったのだ。いうまでもなく、動物は自分の身体を傷つけない。ただ人間だけが傷つけるのだ。とすれば、身体加工こそ人間の特徴、すなわち文明であるということになる。ピアスをしたり、毛髪を特殊なかたちにしたりする若者は、したがってきわめて人間的であり、文明的であるということになる。ちよつとした逆説である。

刺青でも抜歯でもいい。人間が人間になったのは、明らかに自分の身体を傷つけることによってである。それではなぜ人間は自分の身体を加工するようになったのか。自分が自分であることを確かめたいため、社会における自分の位置を明らかにしたいためだ。とすれば、人間は自分が自分であることを確かめずにはいられない存在なのだということになる。逆に言えば、人間は、確認しないかぎりには、自分が自分ではない存在なのだ。

これはとても興味深い事実だ。なぜならそれは、人間はじつは何にでもなれる存在だということだからである。狐にでも狼にでもなれる存在、木にでも石にでもなれる存在だということだからだ。実際、憑依現象は人間の文化と切り離しがたく結びついている。

憑依現象といえば、まるで未開や野蠻の典型のように響く。だが、そんなことはない。むしろ文明の発端なのである。類人猿に憑依現象はない。人間は、巨大集団を形成することによって他の動物には見られない力を発揮してきたが、それが可能になったのはこの憑依現象によつてなのだ。宗教や芸術の根底にも同じ憑依現象が

あると言つていい。

自分が自分であることを知るには、他人にならなければならぬ。人間の自己意識の仕組みは、そのまま社会の仕組みに重なっているのである。人間の社会が類人猿の社会から飛躍したのはこの仕組みによつてだが、そのもつともカンメイな表れが憑依現象だったわけだ。自己とは小さな憑依現象であり、社会とは大きな憑依現象であると言いたいほどだ。だからこそ人間は、憑依現象の一形式としての舞踊を、そして演劇を發明したのである。

難しいことではない。要は、人間は何にでもなれるということにすぎない。けれど、この自由はそのまま不安をも意味している。身体加工は、何にでもなつてしまいかねない自分というものを、あるひとつの何かに固定する技術として成立したのである。とすれば、いま若者たちが自分の身体を加工することに熱中していることの背後にも、同じ不安が潜んでいると考えるべきだろう。

問いはしたがつて、若者たちに向けられるよりは、身体加工をしなくなった人間たちに向けられるべきなのだ。なぜ人間はこの二百年ほど不安を感じなくなったのか、と。

身体加工は啓蒙主義の頃から廃れはじめた。おそらくその頃から、自分は人間であると信じるだけで、不安がある程度は解消されるようになったのである。人間は生まれたままの姿こそもつとも美しい。これが人間主義すなわちヒューマニズム時代の標語だった。だがおそらくいまや、自分が人間であるといった程度のことで不安が解消されなくなつてしまったのだ。科学技術の驚異的な発展とともに、人間はついに自分たちの不気味さに本格的に気づきはじめてたとも言おうか。

膨大な情報の洪水のなかに溺れながら、いま人間はふたたび、原始時代と同じ不安にさいなまれはじめているように思われる。

（三浦雅士『考える身体』）



33 32 31 30 29 28 27 26 25 24 23 22 21 20 19 18 17 16 15 14 13 12 11 10 09 08 07 06 05 04 03 02 01

66 65 64 63 62 61 60 59 58 57 56 55 54 53 52 51 50 49 48 47 46 45 44 43 42 41 40 39 38 37 36 35 34

一九世紀の自由主義は、危険とは誰の目にも見えるもので、危険回避は各自の自己決定に委ねればいいという考え方に立脚していた。危険の経験的自明性と自由主義は内側でつながっていた。すなわちJ・S・ミルの『自由論』が出された一八五九年には、見えない微生物が危険だという医学思想はまだ成立していなかった。病原体説の成立は、コッホによる結核菌の発見が一八八二年であり、パスツールによる狂犬病研究が一八八〇年以降である。自由主義の原則は、危険の経験的自明性というある意味では誤った想定の上に作られてしまった。

その後、われわれは見えない危険の時代を迎えることになった。自動車走らせると地球が温暖化する。だれもその因果関係を見ることはできない。手に取った黒土のひとかたまりにダイオキシンがどれだけ含まれているか、見ることはできない。トウモロコシDNAの中の危険な塩基配列も見えない。吹き寄せる風のなかの放射能も見えない。

現代で安全性を理解するためには、「地球全体で人間が空気の中にする炭酸ガスが原因になって地球が温暖化し南極にある氷河が溶けて、二〇年後に太平洋のなかの珊瑚礁の国を水没させる」ということを理解しなくてはならない。

この文章の中には見えないものがたくさんある。「地球全体」は見えない。「空気の中にする炭酸ガス」は見えない。「地球の温暖化」は見えない。「炭酸ガスという原因による温暖化という結果」は見えない。「南極の氷河」は見えない。「二〇年後」は見えない。

「太平洋のなかの珊瑚礁」は見えない。それではどうして「ゴミをへらせば地球を守ることになるのか」が分かると言えるだろう。もしも、「疑わしいことを信じてはいけない」というタテマエを守るなら、「ゴミをへらせば地球を守ることになる」と信じてはいけないという結論になるのだろうか。

そこで真理をつきとめることにしよう。「科学的真理は何度も同じ条件で実験を繰り返すことによって確かめられる」というタテマエにしたがうとする。石油をたくさん燃やして何度も実験をして見たら、「地球に砂漠が増える」、「たくさんさんの生物が絶滅する」、「人間が生きていくための地下資源がなくなる」、「地面の下がゴミだらけになって水が飲めなくなる」という結果が起こったと仮定

しよう。やっぱり「ゴミをへらせば地球を守ることになる」というのは正しかったという結論がでるだろう。しかし、そのことを確かめる人間は、生き物のいない砂漠で食べ物も水もないという状況にいるかもしれない。「ゴミをへらせば地球を守ることになる」が本当かどうか。何度も繰り返して確かめることができない。環境問題は日常の経験だけでは判断がつかないので、高度の専門的な知識を学ばなくてはならない。情報依存的にしか因果関係は把握できない。悪い結果がでてしまった後では取り返しがつかないので、後悔しないですむように情報を捉えて事前に予防しなくてはならない。

どんな事柄でも「悪い結果がでないように完全に予防すること」はとてもむずかしい。「風邪の予防」の場合には、予防に失敗してもあまり心配はいらない。予防に失敗しても風邪は必ずなるからである。ところが「砂漠が増える」とか「珊瑚礁が水没する」とか「明日から使う石油がない」とか「鯨が絶滅する」とかということは、予防に失敗したら永遠に取り返しがつかない。完全予防という側面から安全の情報依存が成立する。

ベックは、その『危険社会』（一九八六年）で「ヒュム以後明らかとなったように、因果関係は本質的に知覚を通じては推定できない。因果関係の推定はあくまで理論に基づくのである」と述べている。

安全性について情報依存型の社会を作りあげることなしには、われわれは安全を確保できない。安全性は古典的自由主義のタテマエからすれば自己決定権の範囲に含まれる。これは自分の生命の自己防衛権と同種のものとして受けとめられている。実際には、安全であるか否かは経験的に自明ではなく、信頼できる情報に依存している。

（加藤尚武『価値観と科学／技術』）



読解問題 4月4週分

問1 読解マラソン集1番「洞察やひらめきによって」を読んで次の問題に答えましょう。

○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

A 生命の永遠性は、無限に伸びる数直線のメタファーとしてとらえられる。

B 死にゆくひとの哀しみは、未来が確定されていくことにある。

1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問2 読解マラソン集1番「洞察やひらめきによって」を読んで次の問題に答えましょう。

○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

A このわかりにくい文章の中で、要するに作者は、人生はさまざまな可能性のある不確実性に満ちたものだと言っている。

B 人生の不確実性は、確率論的な枠組みでとらえることができる。

1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問3 読解マラソン集2番「生物の遺伝的複製技術という」を読んで次の問題に答えましょう。

○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

A 一卵性双生児のクローン性は、クローン羊「ドリー」のクローン性よりも「完璧」である。

B 伊勢神宮の式年遷宮には時間性があるが、クローン技術には時間性が欠けている。

1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問4 読解マラソン集2番「生物の遺伝的複製技術という」を読んで次の問題に答えましょう。

○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

A クローン技術によって人間の大量コピーが可能になると、同じ人格を持つ個人が大量に生産される可能性がある。

B 伊勢神宮の式年遷宮は、技術の伝承というよりも、同じものをコピーして作ることに意味がある。

1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問5 読解マラソン集3番「一九二〇年代は」を読んで次の問題に答えましょう。

○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

A 草創期の日本の映画館では、弁士の役割は時に映画そのものよりも大きかった。

B 欧米では、弁士はその役割の大きさから、当初から免許制であった。

1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問6 読解マラソン集3番「一九二〇年代は」を読んで次の問題に答えましょう。

○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

A 弁士という仕組みは、無声映画が有声映画に発展する前の一時的な休暇であった。

B 弁士という制度は、大衆からではなく、映画の評論家から批判された。

1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問7 読解マラソン集4番「文明とは何かを」を読んで次の問題に答えましょう。

○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

A 農耕牧畜とは、自然の生物圏を生かした生き方である。

B 人間圏を作って生きるとは、人間が農業から離れ、都市を作って生きることである。

1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問8 読解マラソン集4番「文明とは何かを」を読んで次の問題に答えましょう。

○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

A おばあさんの存在が、人口増加の一つの要因であった。

B 類人猿には、おばあさんという存在はいない。

1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

読解問題 5月4週分

問1 読解マラソン集5番「言語の階層化については」を読んで次の問題に答えましょう。

○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

A 売り手市場とは、売りたい人が買いたい人より多数いる市場である

B 外来語の流入によって日本語の豊かさは次第に失われている

1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問2 読解マラソン集5番「言語の階層化については」を読んで次の問題に答えましょう。

○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

A 英語もまた、他の言語からの影響を受けて変容している

B 言語の純粋性を保てるのは、他の世界から隔絶している言語か、地球上で最も強力な言語かである

1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問3 読解マラソン集6番「研究に限らず、大事業の成功に」を読んで次の問題に答えましょう。

○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

A 科学者は、運に頼るのではなく、努力で運を補わなければならない

B 科学者には、再現性のある結果を出さないぐらいの「いい加減」さが大切だ

1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問4 読解マラソン集6番「研究に限らず、大事業の成功に」を読んで次の問題に答えましょう。

○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

A 科学者になるためには、頭がよいだけでなく、自分の頭のよさを自覚していることが必要だ

B 研究することは、行動であるから、行動に伴う失敗を恐れていてはならない

1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問5 読解マラソン集7番「タクシーに乗って」を読んで次の問題に答えましょう。

○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

A 人間は、他人と仲よくしたいときに自然に何かの「ふり」をする

B 「ふり」をする自分に一貫性はなく、どういう「ふり」をするかは状況によって変わる

1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問6 読解マラソン集7番「タクシーに乗って」を読んで次の問題に答えましょう。

○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

A おかしくてたまらないので笑うときの笑いは、「ふり」とは言わない

B 「ふり」の多くは、無意識のうちに行われている

1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問7 読解マラソン集8番「新しい言葉の指す」を読んで次の問題に答えましょう。

○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

A メタファーとは、ある概念を他の概念によってなぞらえることである

B この文章において、概念はより大きな全体、観念はその概念の要素として考えられている

1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問8 読解マラソン集8番「新しい言葉の指す」を読んで次の問題に答えましょう。

○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

A 議論を戦争と見なす人と議論をダンスと見なす人とが論争をすれば、戦争と見なした人が勝つ

B 戦争やダンスについての概念は、どの文化もほぼ共通だ

1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

読解問題 6月4週分

- 問1 読解マラソン集9番「怠け者でいくじなしの」を読んで次の問題に答えましょう。
○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。
A 人間がドラえもんに対して絶対的な信頼を持っているのは、道具の誤用や悪用に必ず解決の方法があるからだ
B アトムはすべてを自分でやろうとしたが、ドラえもんは道具を提供し、実行するのは人間である
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×
- 問2 読解マラソン集9番「怠け者でいくじなしの」を読んで次の問題に答えましょう。
○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。
A 「天空の城ラピュタ」は、遅れた技術と進んだ技術が混在するという最近のSFの特徴を持っている
B ドラえもんは、エイジェントが自主的に判断する時代を先導している
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×
- 問3 読解マラソン集10番「人の生活を支えるシステムには」を読んで次の問題に答えましょう。
○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。
A 予測し得ないことは起こさないようにしようというのが、現代の社会の風潮だ
B いったん取り決めたこともうやむやにしようところが日本文化にはある
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×
- 問4 読解マラソン集10番「人の生活を支えるシステムには」を読んで次の問題に答えましょう。
○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。
A 昔のパソコンには、「やおよず」という優れた基本ソフトがあった
B 西洋人は論理で理解するが、日本人は論理意外の共通認識で理解する
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×
- 問5 読解マラソン集11番「耳にピアスをしている若者が」を読んで次の問題に答えましょう。
○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。
A 体を傷つけたり体の自由を制限したりする文化は、洋の東西を問わず存在した
B 人間が自分の身体を傷つけるのは、社会における自分の位置を明らかにするためだ
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×
- 問6 読解マラソン集11番「耳にピアスをしている若者が」を読んで次の問題に答えましょう。
○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。
A 自分に対する確信が持てるようになることが、文明の進歩である
B 人間は生まれたままの姿がもっとも美しいと気づきつつある
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×
- 問7 読解マラソン集12番「一九世紀の自由主義は」を読んで次の問題に答えましょう。
○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。
A 一九世紀まで、見えない危険や避けられない危険があるとは考えられていなかった
B 現在の危険は、科学技術の発達によってもたらされた「見えない危険」である
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×
- 問8 読解マラソン集12番「一九世紀の自由主義は」を読んで次の問題に答えましょう。
○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。
A 「ゴミをへらせば地球を守ることになる」という考えは、証明されていない
B 現在の安全は、信頼できる情報があるかどうかということに依存している
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

4 ~ 6 月

小1 コード： nane パ ス：	小2 コード： nane パ ス：	小3 コード： nane パ ス：
小4 コード： nane パ ス：	小5 コード： nane パ ス：	小6 コード： nane パ ス：
中1 コード： nane パ ス：	中2 コード： nane パ ス：	中3 コード： nane パ ス：
高1 コード： nane パ ス：	高2 コード： nane パ ス：	高3 コード： nane パ ス：

1 ~ 3 月

小1 コード： nane パ ス： PDF	小2 コード： nane パ ス： PDF	小3 コード： nane パ ス： PDF
小4 コード： nane パ ス： PDF	小5 コード： nane パ ス： PDF	小6 コード： nane パ ス： PDF
中1 コード： nane パス	中2 コード： nane パス	中3 コード： nane パス

ス： PDF	ス： PDF	ス： PDF
高1 コード： nane パ	高2 コード： nane パ	高3 コード： nane パ
ス： PDF	ス： PDF	ス： PDF